

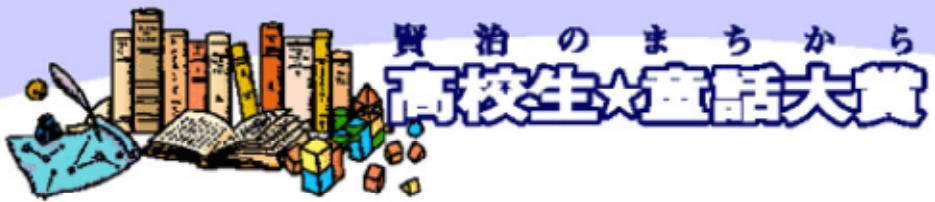
第12回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「かけごえは「泣き虫ヒーロー！」」

神奈川県 横浜共立学園高校2年 吉岡 明日香



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『かけこえは「泣き虫ヒーロー!」』

神奈川県 横浜共立学園高等学校二年

吉岡 明日香

「心が燃える、真っ赤に燃える。勇気のヒーロー、ティーチャーレッド!」
そんな言葉とともに現れる、赤い衣装に身を包んだよい子のヒーロー、勇気学^{まなび}。普段は小学校教諭を務める彼だが、ひとたび子供たちに呼ばれば、正義のヒーロー、ティーチャーレッドに大変身。

マンガのようなタイミングで現れたかと思えば、まるでステップを踏むかのように敵、通称「モンペア」を倒し、最後に教訓じみたことを叫んで帰っていく。

そんなヒーローを演じる僕、^{なるみ}鳴海。

ちなみに今日の教訓は「算数は毎日解こう!」本編とは無関係だ。

「お疲れ、なる君」

首筋に走る痛みに似た冷たさに悲鳴をあげ、振り返る。するとそこには「モンペア」を演じる秋月さんが立っていた。彼は僕にコーラを差し出すと隣に座る。

彼は僕の背中をバシバシと叩きながら話しかけてくる。僕が痛み^{いた}みに咳き込んでもお構いなしだ。

「今回も決まってたよ」

「あ、はい、ありがとうございます」

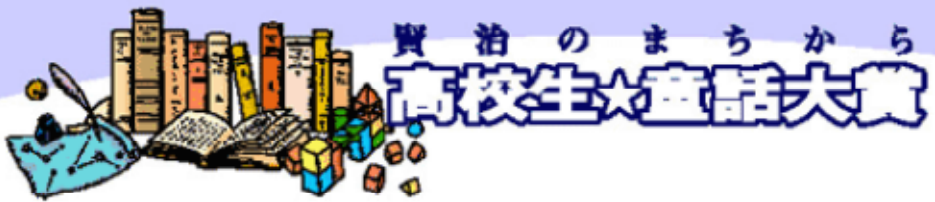
モゴモゴと言葉を発する僕に秋月さんはため息を吐いた。

「なる君は本当にギャップ激しいよね。勇気学の時はあんな生き生きしてるのに」

「その、仕事ですから、自分を捨てて」

「かー! そういうこと言っちゃう? 言っちゃいますか!」

秋月さんは肩をすくめると僕の頭を軽く叩き、少しだけさみしげな顔で、「なる君は仕事じゃなくても自分を捨ててるじゃない。たまには本気で怒ったり、泣いたりしていいんだよ」と言った。



真意が掴めず、首を傾げた僕を一瞥すると秋月さんは時計を見て立ち上がる。

「さて、本日第二回目のヒーローショーだ」

彼は逆三角形の眼鏡を掛け、ショーの台詞を僕に投げつけてきた。

「ティーチャーレッド！ 今日こそ修学旅行親同伴を許可してもらおうか！ こいつが人質だ！」

僕は、俺は即座に言葉を返す。

「待て！ 生徒を返せ！ 親同伴については、校長に後で相談してやる！」

「後で、なんて生ぬるい！ 校長を連れて来い！」

「くっ、仕方がない。グリーンとブルーを呼ぼう」

俺は懐に隠していた体育で使う笛を鳴らした。これで彼らが来てくれる。そう安心した矢先、俺はモンペアがほくそ笑んでいるのに気づく。

「なんだ、なにがおかしい！」

「甘いな、ティーチャーレッド、ここがどこだか分かっていないようだな」

「はっ、ここは、音楽室！」

「そうさ、この部屋の防音設備は完璧だ。笛の音などこの壁の餌食なのさ！！」

「モンペア、貴様あー！」

パンツと秋月さんが叩いた手の音で僕は我に返った。

「あ」

「台詞はバツチリだね。さて、行こうか」

秋月さんは舞台袖から集まった子供たちを覗いて呟く。

「このヒーローって、なんでこんな人気なのかね？ こんな社会風刺ヒー

ロー、俺かなり問題あると思うんだけど」

「それは、多分」

誰もが目を背けていることに果敢に挑んでいくからなのだろう。子供だけでなく、そういったものには多くの人があこがれるものだ。僕も少しだけうらやましい。だから、きつと。

「多分、なに？」

「あ、いえ。なんでもありません」



でもそんなことを口にするのは少し恥ずかしかったから、僕は口をつぐんだ。秋月さんは、そう？ と短く答えて舞台へと足を踏み出した。子供たちの悲鳴に似た歓声が聞こえた。

「鳴海、いらっしやい」

病室には姉がいた。うん、と小さく言葉を返し、僕はベッドに眠る姪っ子の頭をなでる。

ちらりと時計を見ると、姉は姪っ子の肩を揺すった。

「しの、教師戦隊見ようか」

その言葉に僕はギョツとした。教師戦隊とは僕が今日も演じてきたあのヒーローショーではないか。いつの間にテレビで放映されたのか。そんな話は聞いていない。

僕の驚きを悟ったのか、姉はくすりと笑って言う。

「別にテレビ放映されてないよ。鳴海が演じたやつ、ビデオで撮^とっていても四時に見てるだけ」

「ビデオで？ でも、姉さん見に来たことなんて、ないよね？」

「コネってやつ」

どういふことなのだろう。首を傾げた時。む、と一瞬間^{みけん}間にしわを寄せ、姪っ子が目を開けた。そして僕の姿をとらえると嬉^{うれ}しそうに声を弾^{はず}ませる。

「なる兄ちゃんだ！」

「あ、おはよう、元気？ しのちゃん」

「元気！ いっぱい！ お母さん、四時!!」

時計を見ると、姪、しのちゃんは手をパタパタさせながら姉をせかす。

「ティーチャーレッド見るの！」

その様子に姉はほほ笑み、DVDをセットしながら僕に話しかける。

「しのはティーチャーレッドのお嫁さんになるんだって」

そして僕の肩を小突いて、しのちゃんには聞こえないくらい小さな声で言う。

「責任とってね。べた惚^ぼれ」



一体ティチャーレッドのどこにお嫁さんになりたくなるほどの魅力があるのかは分からなかったが、ふと舞台の前に座っていた子供たちを思い出す。どの子もわくわくキラキラ目を輝かせていた。

しのちゃんは生まれつき体が弱い。命に関わる大病ではないが、高熱や肺炎などで五歳になる今、入院している期間の方が家で生活よりも長いのではないだろうか。

姉の夫、つまりしのちゃんの父親は二年前に事故で他界^{たかい}していて、今はいない。

姉はしのちゃんの医療費や生活費を一人で稼^{かせ}いでいる。我が姉ながら本当に頭が下がる思いだ。学生のかたわらヒーローショーのアルバイトをする僕とは覚悟が違う。

教師戦隊のDVDを見終え、しのちゃんが眠るのを見届けると僕たちは病室を出た。姉はこれからレジ打ちの仕事だ。

エレベーターが静けさに包まれた。沈黙を破ったのは僕のほうだった。

「姉さんはすごい」

「鳴海、それ今更」

僕が呟^{つぶや}いた言葉に姉はほほえんで答えた。

「でも、私は楽しんでやってるから。子育ても仕事も。だから幸せ」

それに、と笑う。

「しのはまだ小さくて、弱い。でも、私のヒーローなの。私を救ってくれて、守ってくれる。そんな病弱ヒーロー。鳴海も、そう」

「僕？」

「みんなだれかのヒーローなんだよ」

少しだけ照れくさそうに、姉は肩をすくめ「受け売りだけど」と笑った。

「恋の悩み？」

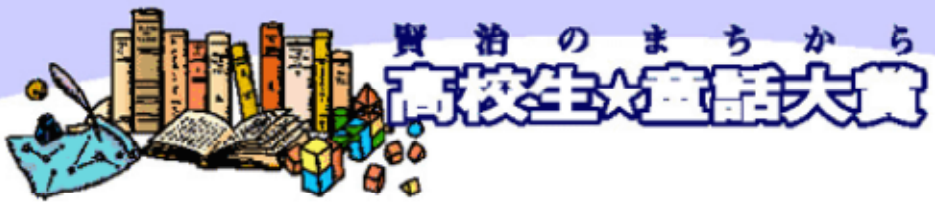
秋月さんの突然の問いに僕は首を傾げた。

「あの、なんの話ですか」

「いやね、最近元気ないじゃない。なる君」

「はあ」と僕のあいまいな答えが気に入らなかったのか、秋月さんは僕の頭を軽く一発叩くと真正面から僕の顔を見つめて言う。

「あのねえ、君はヒーローなわけだよ。俺は敵なわけだよ。信頼関係が大事



なの！」

やだやだ、とわざとらしく彼は首を横に振る。僕は首に掛けられた笛に触れながら、彼に尋ねた。

「僕は、ヒーローですか？」

彼は少しだけ驚いた顔をしたが、すぐに答えてくれる。

「君はティーチャーレッドだ！ って言いたいところだけど、君が聞きたいのはそういうことじゃないんだろうね」

秋月さんは優しく微笑んで、僕を見つめる。

「ねえ、なる君。受け売りだけどね、人はみんな誰かのヒーローなんだよ」

「ああ、それ」

思わず笑ってしまった。「昨日聞きました」

すると後は目を丸くして、前髪をつまんで引っ張った。彼が照れた時の癖だ。

「参ったな、格好がつかない」

長いため息を吐いた後、秋月さんは清々しい顔で僕の頭を優しく撫でた。

「格好はつかなかったけど、俺がそう思ってるのは本当。君をヒーローとして必要としている子がいるじゃない。気付いていないだけだ」

僕は首を傾げた。まるで彼には分かっているかのような口ぶりだが、一体誰のことだろう。

「それが、分からないので、困っています」

すると秋月さんはいたずらっぽく笑って、

「なら俺たちが教えてあげることしよう。なる君が珍しく俺に相談してくれたんだ。力になってあげるよ。楽しみにしてて」

そう言うのと彼は鼻歌を歌いながら、更衣室へと向かう。その背中に僕は気になっていたので問いかけた。

「その言葉、僕の姉も受け売りだって……言ったのは、有名な人、ですか？」
振り向かずには彼は答えた。「俺のヒーロー」

それから数日後。いつも通り僕は真っ赤な衣装に身を包み、台本の確認をしていた。

秋月さんが教えてくれると言っていた、僕を必要としてくれる人は分からずじまい。



彼に聞いても「もうすぐ分かるよ」とはぐらかされるだけだった。本当にそんな人がいるのだろうか。彼は僕を元気づける為にそう言っただけで、期待してはいけないのかもしれない。

そう思った時だった。

「なる君！」

舞台でだって聞いたことがないほど大きく、焦った秋月さんの声に僕は背中をまるめた。

「えと。あの……なにか」

驚いて小さくなってしまった僕の声など気にも留めず、彼は大声で続ける。

「今病院から電話があったんだ。星野さんって人から君に、『娘が倒れたから来てくれ』って」

「星野……?」

姉の苗字だ。娘？ しのちゃんが倒れた？

妙な浮遊感が身体を襲った。めまいがする。意識が飛んでしまいそうなほどに熱い頭の中で、行かなくてはならないと、ただその気持ちだけがはっきりとしていた。

「いかなくちや」

「待って、なる君」

腕を掴む秋月さんの手が冷たかった。けれど違う。きっと僕が熱いだけだ。働かない頭を無理やり働かせ、なんとか彼に答える。

「なん、ですか」

「あと五分でショーが始まる。君を、ヒーローを待ってる子供たちが大勢いるんだ」

底冷えするほど冷たい声だった。身体はこんなに熱いのに、寒気がした。

「君が行くべき場所は病院じゃない。君はヒーローになりたかったんだろ？必要とされてるんだ。この幕の先にいる子供たちが君をヒーローとして求めている。行こう」

僕の腕を掴んだまま、彼は舞台袖へと向かう。冷たかった。寒かった。

「ならヒーローになんてなれなくていい！」

突然の大声に身がすくんだ。自分の声だと気付くまでに時間がかかった。



けれどその理解の為に割く時間すら惜しいと言わんばかりに僕の口は止まらない。

「違う！ そうじゃない！ 僕はそんなものになりたいんじゃないんだ！」
秋月さんの手を振りほどき、走った。涙が止まらなかった。

シヨ一の場所から病院までは電車を使わざるを得ないのだが、電車に乗った記憶がない。

どの道をどのように走ったかも覚えていない。ただただ急がなくてはと、それだけを考えていたことは覚えている。

病院に着くと、姉が正面玄関で「いらっしやい」とのんきに僕を出迎えた。

「しのちゃんは!？」

「今連れて行く。それよりも鳴海、その格好で来たの？ まあその方が好都合か」

姉の言葉の真意が掴めなかったが今はそれよりもしのちゃんが心配だった。

「姉さん、早く」

「そんなに焦らないで。行こう」

姉の後を追ってエレベーターに乗り込む。階段を駆け上がったほうが早かったかもしれないと冷静な頭で考えていた。

「鳴海」

「なに？」

「ねえ、気付けた？」

「なにが？」

姉はそれ以上なにも言わなかった。沈黙が苦しくて、エレベーターは妙に遅く感じた。

「しのちゃん！」

病室に駆け込むと。

「わあ！ お母さん！ レッドだよ！ レッド来た!!」

しのちゃんがベットの所で飛び跳ねていた。

「しの、レッドがしのお見舞いに来てくれたんだって」

「え、あれ？ ……しのちゃん？」

見たところ怪我はないし、顔色も悪くない。むしろ良い。少し前に倒れたとは思えないほどの元気に開いた口がふさがらなかった。



「姉さん、どういうこと？」

半ば放心状態で尋ねると、姉は微笑む。

「嘘だから」

全身の力が抜けた。何故嘘を、とか、そんなことはどうでもよかった。ただ目の前ではしゃぐしのちゃんの姿に、さっき止まったと思った涙がまた溢れ出した。

小さな手が僕の涙を拭う。しのちゃんの、温かな手だ。

「レッド、泣いてるの？ どこか痛い？ 大丈夫？」

大丈夫だと答えようと口を開いても、漏れてくるのは嗚咽だけ。なんにも言えず、ただ泣く僕の頭をしのちゃんが優しく撫でる。

「なる兄ちゃん」

「……え……」

「痛い痛い飛んでいけー！」

「しの……ちゃん」

「なる兄ちゃんはね、泣き虫さんだけど、しのがピンチの時は、絶対に駆けつけてくれるから、しののヒーローなの。お返しにしのは、なる兄ちゃんが泣いてたら助けてあげるの」

思わず笑ってしまった。「それじゃまるで」「しのちゃんが僕のヒーローだ」涙を拭い、姪の頭を撫でる。

「ありがとう、もう、痛くない」

そう言ってしのちゃんに笑いかけた時、病室のドアがけたたましい音を立てて開かれた。

驚いて目を向けるとそこには、モンペアに扮した秋月さんが立っていた。

「見つけたぞ！ ティーチャーレッド！ 今日こそ登下校親同伴の許可をもらおうか！」

僕が疑問を口にするより先に、しのちゃんが悲鳴に似た歓声を上げた。

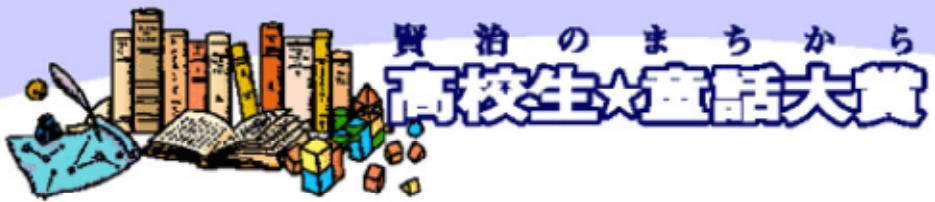
「レッド！ がんばって!!」

そうだ、俺はティーチャーレッド。よい子のヒーロー。

「心が燃える、真っ赤に燃える。勇気のヒーロー、ティーチャーレッド！

モンペア！ 覚悟しろ！」

地面を蹴り、飛び上がる。燃える闘志。燃える正義感。これが、俺だ。



はっと我にかえった時、秋月さんは頭にたんこぶを作って、床で伸びていた。

看護師さんにもらった氷の入った袋を秋月さんに渡す。

「本当に、すみません」

ぺこりと頭を下げると、秋月さんはいやいやと手を振った。

「いいんだよ、計画通り計画通り」

「……計画？」

「言ったでしょ。君をヒーローとして求めている人を教えてあげるって」

だいぶ落ち着いた頭で今までのことを振り返る。つまり、これは。

「義姉さんと、俺がグルだったんだな、これが」

愉快そうに彼は笑う。僕は騙たまされていたのか。いや、それよりも。

「ねえさん？」

「……覚えてないだろうとは思ってたけどね。ねえ、なる君。俺の秋月って芸名なんだよ。本名はね、星野って言うんだ」

何度も耳にした、親しみのある苗字。姉の、苗字。

「まさか、秋月さん」

「結婚式以来だね、君のお姉さんに、兄がお世話になりました」

「そんな、え」

「あ、ちなみに教師戦隊のDVDを義姉さんに渡してたのも俺。しのちゃん、喜んでたでしょ」

いたずらっぽく笑う彼に全身の力が抜けた。

「なんで、こんなことを……」

ぼやいた僕の言葉に、秋月さんはどこか遠い目をした。

「俺もヒーローになりたかったから。どうだろう、俺は君のヒーローになれたかな？」

彼がどんな答えを望んでいるのか、そんなことすぐに分かった。今までの僕だったら、何のためらいもなくうなずいていたに違いない。

けれど、今。いたずら心が芽生えて。

「秋月さんは、僕のヒーローじゃありません」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「え」

「僕じゃなくて、僕と、姉さんと、しのちゃんの、ヒーローなんです
そう言っつて僕は笑う。秋月さんも笑った。

そして僕の肩に手を置き「行こうか」

「え、どこに？」

「そりゃあ遊園地だよ。突然いなくなるから監督がご立腹だ」

はっとした。そういえば僕は勢いだけで仕事場を抜け出してきてしまっ
たんだ。

「そんな顔をしないの」

「その……ティーチャーレッドでも、怒られますか？」

おずおずと尋ねると、ばしんと頭に衝撃があった。叩かれた。

「そりゃあ怒られるさ」

怒っているかと思っただけで、彼は笑っていた。

「だって」

「今君はレッドじゃない、ただのなる君だろ」

一瞬あっけにとられたが、ああ、とすぐに納得した。

「はい。僕は、しのちゃんの泣き虫ヒーロー、鳴海です」